

巻頭言

「連帯社会」の構築とその運動課題

鈴木 雄一（一般社団法人日本社会連帯機構 副代表理事）

「言わねばならぬことを」言う
勇気を持つ

昨年の9月9日の東京新聞に「碩学の先輩に学ぶ」と題して、現在の中日新聞の前身の一つ、新愛知新聞・信濃毎日新聞で主筆を務めた「桐生悠々」のことが紹介されていた。明治時代から昭和初期にかけて反権力・反軍的な言論を貫き通した記者である。桐生悠々は「言いたいことを言う」のは権利の行使、「言わねばならぬことを言う」のは義務の履行で、真の記者、ジャーナリストは、「強者（権力者）の言い分を鵜呑みにせず、自らの知識と判断力で、その非を指摘する使命の強さが必要だ」というのが信念であったという。

この桐生悠々の「言わねばならぬことを言う」という義務の履行は、単にマスメディアや記者に課せられたものだけでなく、国の内外で格差や貧困が広がり続け、いっそう混迷し、混沌とする今の社会に生きている私たち一人ひとりに課せられたテーマなのではないだろうか。権利の行使として「言いたいことを言う」のは責任の是非を問われぬし、自分に不利だと思えば行使しなくてもいい。しかし、「言わねばならぬことを言う」のは、時として犠

牲さえ伴う。このことは原発の「安全神話」に疑義を訴え続けてきた専門家、研究者たちが如何に組織や社会から排除され、冷遇され続けてきたことから明らかである。それでも彼らは「言わねばならぬことを」言い続け、福島第一原発事故によってその正しさと真実が証明されたことを私たちは忘れてはならない。

憲法の危機に際して

先の総選挙で民主党が惨敗し、改憲と集団自衛権の行使を掲げる自民党の安倍政権が再び誕生した。脱原発と合わせ、憲法がいよいよ大きな危機に晒されだした。このまま崩壊的に、原発が再び推進され、そして主権在民・基本的人権・平和主義を柱とした世界に冠たる平和憲法が、とりわけ9条が一部の権力者たちによって改憲されては絶対にならない。そもそも憲法は、公権力を監視しその乱用を縛るためにあることは論を俟たない。昨年末に亡くなった憲法の起草者の一人として24条（両性の平等）を担当したベアテ・シロタ・ゴードンさんは、戦争放棄を謳った9条を「戦争が生んだ真珠」と形容した。その憲法を変えて安倍政権は何

をしようとしているのか。いま、私たちは傍観したり、怯んでいる場合ではないだろう。

主権者の一人として「言わねばならないこと言う」時である。基本的人権を保障した11条、幸福追求権を保障した13条、法の下での平等を謳った14条、そして男女平等の24条、生存権を保障した25条、学ぶ権利を保障した26条、労働権を保障した27条、これらの条項を読み返す度に、今の日本社会が如何に憲法を蔑ろにしているかを痛感せざるを得ない。

そして憲法が国民一人ひとりに保障し、与えている権利を真に行使してこそ、真珠である9条がその輝きを増すに違いない。そのためにも私たちには「言わねばならない」義務がある。では、どう言うべきなのだろうか。

より明らかになった 日本社会連帯機構の使命と役割

不肖、私が副代表理事を務める一般社団法人日本社会連帯機構が昨年12月に第3回総会を開催し、「日本の再生は困難を抱える当事者や、それに気づいた人たちの連帯から始まる。日本社会の未来を市民自らが切り拓くため、私たちは本格的に社会連帯運動を始めなければならない。誰かに任せるのではなく、自らが目の前の困難に目を背けず、本質を見据え、一步を踏み出そう」という総会宣言を採択した。

一人の力には限界がある。しかし、脱原発を掲げて毎週金曜日に実施されている官邸デモは、その主が替わっても「声」を出

し続けているように、想いを同じくする人々が連帯し、発言し続けることが、「言わねばならないことを言う」ために最も大切な運動スタイルだろう。それには連帯する力を一人ひとりが身につけることが求められる。連帯する力とは人とつながる社会力を身につけることである。日本社会連帯機構は、そのための情報発信基地であると同時に、人と人、人と組織、組織と組織、組織と政策をつなげ、結びつけ、橋渡しをするコーディネート機能を持たなければならない。また、次代を担う人材養成する役割も持つ。国際協同組合年を記念して、昨年11月17～18日に大宮ソニックシティで開催された「いま、協同が創る2012全国集会」は、このことを改めて実感させてくれた。集会の成果は、約2,800人(2日間の延べ人数)の参加者が今後、どうネットワーク化され、つながり合うかにかかっていると言っても過言ではないと思う。それには連帯する行動や連帯の成果を可視化させていくことが重要だ。地域での連帯、仕事起こしの連帯、働くことをめぐる連帯、働くリスクをめぐる連帯、資金調達での連帯、消費生活をめぐる連帯、学びをめぐる連帯など、一人ひとりが社会の構成員の一人として、また、当事者として身近なところから、出来ることから参加し、発言し始めることが、時間はかかるとしても、やがて大きな潮流をつくり出し、社会を変える力になることを確信したいと思う。微力ではあるが私もその一人になることを改めて申し添えて巻頭の言葉としたい。